

筋骨格ストレスマーカーから復元する身体活動の多 様性 : 日本列島出土の古人骨を用いた縄文・弥生・ 中近世の 総合的比較

米元, 史織

<https://doi.org/10.15017/1560374>

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (理学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名	米元 史織			
論文名	筋骨格ストレスマーカーから復元する身体活動の多様性 —日本列島出土の古人骨を用いた縄文・弥生・中近世の 総合的比較—			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	瀬口 典子
	副査	九州大学	教授	岩永 省三
	副査	九州大学	教授	溝口 孝司
	副査	大阪大学	教授	佐藤 廉也
	副査	九州大学	名誉教授	中橋 孝博

論文審査の結果の要旨

本研究は、人骨から活動を読み取る1つの方法である筋骨格ストレスマーカー(muscle skeletal stress markers、MSMs)を用いて、生業・生活様式の影響がどのようにMSMsに表れるのか、その影響の表れ方の時代性や地域性を検討し、身体活動の多様性とその通時的変化を明らかにしている。日本列島出土の縄文・弥生時代および中近世(室町時代・江戸時代)に属する人骨を用いることで、階層化の進行した社会とそれ以前の時代との対比を行い、社会内部の非均質性(inequality)の進展に伴う、集団間・集団内に生じる身体活動の多様性の変化に関する議論を行なっている。

第1章では、上記の研究目的を詳述し、本稿の具体的な構成について述べている。

第2章では、先行研究を整理してその問題点を示し、本研究における取り組みについて述べている。これまでのMSMs研究の多くは、身体活動の復元のみを目的としており、生業様式や生活様式を明らかにするという目的においては不十分であった。本研究は、人骨形態からの身体活動の復元だけではなく、考古学や文献史学、文化人類学の成果と総合し、物質文化と自然環境、およびそれらを利用する際に形成される行動パターンと、それが性別や年齢、個人の立場に基づいてどのように異なるのかを検討する。そこから「活動」「技術」「生存のための集団のあり方」の総称としての生業・生活様式を復元することを試みる。

第3章では、本稿で対象とした集団と分析方法を示す。対象資料は、縄文・弥生時代および中近世の人骨資料であり、その所属時期、年齢構成や出土遺跡の立地などの特性をまとめた。観察対象は上・下肢骨の筋付着部22部位のMSMsである。第2章で提案した身体活動・生業様式・生活様式を明らかにするための分析方法を述べている。

第4章において、縄文時代と弥生時代の検討を行った。まず、考古学や文化人類学の研究成果から、各集団でどのような道具が用いられ、集団間の生業活動にどのような違いがみられるのかを明らかにした。次に、Murdock(1937)の性別分業の研究をふまえ、MSMsパターンの類似と差異の表れ方を男女別、集団別に検討した。また、MSMsパターン分析から、これまで民族誌などから類推されてきた性別や年齢に基づく分業・活動区分の在り方を検討した。その結果、縄文時代と弥生時代の集団間のMSMsの差、集団内の男女間のMSMsの差や年齢ごとのMSMsのあらわれ方は異なることが認められた。縄文時代の各集団では男性よりも女性の方が活動の多様性が大きい、弥生時代では男性の方が女性よりも活動の多様性が大きくなること、また、MSMs

の加齢変化の様相が両時代間では異なるなど、水稻農耕という生業の確立とともに活動の仕方が大きく変化したことを明らかにした。

第5章では、歴史時代、すなわち中近世の検討を行った。まず、中近世に関しては文献史学や民俗学的研究から各集団の生業諸活動と生産体制を推定し、そのうえで、対象集団のMSMsパターンの対比を行った。また、性別、年齢に基づく活動区分の在り方も考慮にいれ、集団間のMSMsの類似と差異の表れ方を検討した。その結果、集団間のMSMsの差、集団内の男女間のMSMsの差、そして、年齢ごとのMSMsの差はより多様であることが明らかになった。特に、江戸時代の上位階層である武士層とそれ以外の町人層や百姓層の違いが顕著に析出された。

第6章では、縄文・弥生・中近世の全集団を通して、MSMsの集団間・集団内の差の時代変化の検討、加えて、集団間の活動差のあらわれ方、集団内の男女差のあらわれ方や、年齢に基づく活動の違いのあらわれ方の時代変化も検討した。その結果、集団間または集団内で生じる身体活動の差異のあらわれ方は、時代によって大きく異なり、縄文時代や弥生時代よりも、分業が確立した中世や階層社会である近世の方が身体活動の多様性は大きいことがわかった。

第7章では、以上の分析結果を踏まえて考察を加える。縄文時代・弥生時代・中近世の各集団の道具の組成や文献記録、MSMsの結果を総合的に検討し、その上で、MSMsの多様性の要因を議論した。以上から、専門化が進み、社会内部の分化が進行するにつれ、身体活動の差は明確化し、大きくなる傾向があることを明らかにし、MSMsの多様性は社会内部の不均質性の進展の影響をうけるものであると結論づけた。

第8章では、本研究によって明らかにされた結果と考察を整理し、一連の議論を総括し、今後の研究の課題と展望について述べている。

以上、本研究は、我が国に未普及のMSMsについて、従来の研究例における問題点を整理した上で十分な効用をもつ新手法としてほぼ確立させ、その適用によってこれまで未解明だった領域まで踏み込んだ興味深い議論を展開しており、博士論文として非常に独創性が高く、この分野の研究進展に貢献する研究と見なされる。よって博士（理学）の学位に値するものと認める。